

〈研究発表および講演要旨〉

【研究発表】

荻生徂徠の『政談』と『鈴録』について

許 家晟

荻生徂徠の晩年には、著名な『政談』のほか『鈴録』という著作がある。『政談』は、享保十年から執筆を開始し、享保十二年四月吉宗に提出したものとされている。そして『鈴録』の序の落款は「享保十二年丁未正月」であるから、『政談』献上のわずか三か月ほど前のことになる。また、兩著の執筆時期が非常に近いことだけでなく、さらに内容や固有名詞の使用から、兩著の性格はほぼ同じものであることを推測することができる。しかし、兩者の関連性についての研究は今まで皆無に等しい。発表者はこの點に注目し、ささやかな考察を加えたい所存である。

後山外派の相即解釋における繼承と發展

弓場 苗生子

趙宋期天台宗に展開した山家山外の争いにおいては、四明知禮を代表とする山家派とそれに對立する山外派との間で、天台の正統義をめぐる盛んに議論が交わされた。本発表では特に後山外派と稱される雪川仁嶽と神智從義の教學を中心に、先行する山外派説からの繼承と、そこにおける新たな發展について扱うこととする。後山外派が立脚するところの相即義とは如何なるものか、またそれは先行する山家批判の論とどのように關連し、かつ相異なるのか、これらの點を明らかにすることを目的としたい。

彭曉の煉丹理論とその思想的地位

江波戸 互

五代・後蜀の人である彭曉（號は眞一子）は、『周易參同契分章通眞義』・『還丹内象金鑰匙』の二書を著し、『周易參同契』注釋を行ったことで知られる。だが、その獨特な煉丹理論についての踏み込んだ考察は、これまで殆ど爲されてこなかった。そこで本発表では、彼の煉丹理論が如何なる特徴を備えているのか考察する。また、その理論を踏襲したと思しき煉丹文献である『古文龍虎經註疏』と『紫陽眞人悟眞篇註疏』を取り上げて、議論の助けとしたい。

正一教・玄教の江南進出と在來道觀

酒井 規史

元代において、龍虎山の張天師の勢力（正一教）が江南の道教を管轄する權利を得た。また、張天師にしたがって入朝した張留孫は歴代皇帝の尊崇を受け、「玄教」と呼ばれる支派を形成した。正一教と玄教は配下の道士を江南各地の道觀に派遣し、その勢力を擴大していった。それと同時に、もともと存在していた各地の道觀とも關係を結んでいった。本発表では正一教・玄教の江南進出について、いくつかの道觀を例にとりながらその過程を明らかにしたい。

五臺山・金閣寺の構造とその教理的背景について

岩崎 日出男

不空三藏が大曆元年（766）、勅許を得て五臺山に金閣寺の建立を推進し、大々的にその文殊信仰を鼓吹したのは周知の通りである。発表者もかつて、この不空三藏による五臺山文殊信仰宣布の理由を論じ、結論として代宗皇帝の念持佛が普賢菩薩であったことにその大きな理由のあることを指摘した。一方、金閣寺の構造や教理的背景について、佛頂思想との關係について論じた千葉照觀氏などの研究があるものの十分に解明されたいとはいえないのが現状である。本発表では、従来の研究の是非を問うとともに新たな問題の提起とその解明にあたりたい。

【講演】

親鸞と『大乘起信論』——報身・報土の問題を中心に

竹村 牧男

法然の淨土教は、善導を受け継ぎ、凡夫が報土に生まれ得ることに意味があった。親鸞は法然の淨土教こそを眞宗と考えていたはずで、凡夫の報土往生のことも當然、繼承していたことであろう。しかし親鸞においては、報土への往生のことが判然とせず、むしろ法性法身に相當する眞佛土に往生するかのようである。いったい親鸞は報土のことをどのように考えていたのであろうか。このことについて、『大乘起信論』の佛身論等を對置しつつ、探ってみたい。